

Dance with Heart  
The Kikunokai Troupe  
We are burning with enthusiasm  
in creating national art for the new era.  
Chairperson Michiyo Hata

# 日本のおどり

発行：舞踊集団 菊の会

〒161-0031  
東京都新宿区西落合2-21-23  
TEL 03-5983-6001 (代表)

京都八瀬研修所

〒601-1254  
京都市左京区八瀬野瀬町10  
TEL 075-712-8701 (代表)<http://www.kikunokai.co.jp/>

Dancing from the heart

Photo Hiroshi Mizobuchi

## Dancing in the New Century

### 新世紀に舞う

舞踊集団 菊の会

代表 畑道代

二十一世紀の元旦を晴れやかに迎え、心新たな思いで扇を手に背筋を延ばして正座する。

新年の扇は京都の十松屋から送られて来たばかりの巳年の扇、色鮮やかな鱗模様をの古典調でありながら何かエキゾチックな赤を基調にした九寸五分の女子用の扇と、紺を基調とした一尺の男子用の扇。

先日巳年の新年を寿ぐ蛇に因んだ踊りはありませんか、と聞かれた。すぐ思い出すのは「道成寺」や「日高川」等の様に女性の執念が蛇体となって道成寺の釣鐘の中に逃げ隠れた安珍を恋慕し、七巻半取り付いて、鐘をも溶かし二人は炎と共に消えるというもの。

道成寺に残された道成寺絵巻の終末には二人が住職の枕元に現れ、法華経を回向される事で成仏すると説かれているが、舞踊では女の執念の恐ろしさが強調されていて寿ぐ作品ではない。

お祝いの席で踊られる長唄の「松の緑」や「老松」は散りやすい一時の花よりも常に若々しい緑をたたえる松(人)や老いても尚、心は青春を表わす老松(熟年)は素晴らしい題材だと思ふ。しかし一般には言葉がわかりにくいと言われてしまふ。又長唄の「鶴亀」について幼い子供から、なぜ目出たのかと聞かれた事があった。「鶴は千年、亀は万年」と長生きするから目出たのよと言つと「うちの亀はすぐ死んだ」と言う。また一方で「鶴も亀もお肉がまずいから人が食べべなかつたので長生きしたのは…」等々の会話が出て「鶴亀」の凍とした気高さからは程遠く、生活環境の大切さが身に沁みる。

いづれにしても今の日本で日本らしさを見つける事が難しくなった新世紀を、日本で創作され、誕生した扇で心新たに、春夏秋冬、雪に舞い、花に舞い、月に舞って行きたいと思う。本年も、どうぞよろしくお願い申し上げます。



Thank you, Kikunokai Seeing a dance drama for the first time

# 「菊の会」ありがとう 初めて舞踊劇を見て

博多歴史研究家 江頭 光



『博多どんたく譚』を實際に見るまで、私は不安を抱えていた。主催側から「どんたくの歴史を」と求められ、知る限りを話し、資料をお渡しし、そのあと脚本はもう出来ているのを知っ

た。登場する川上音二郎は別として箱崎ツンちゃん、高場乱、一丸知定ら、市民一般になじみは薄い。それらの絡みにも無理が感じられたからだだった。

だが、初幕「筑前今様」の好ましい濃淡の衣装、見事に統制された群舞に「ややッ」と思い、間もなく「舞踊劇」を「歴史劇」と早合点していたのに気付いた。「よし、あとは史実詮

索など忘れ、美しく流れる舞台を、自分が感じるままに眺めよう」。そう思うと気がスッと楽になり、ぐいぐいと舞台に魅せられていくのが、よくわかった。出演者は外来者役を除き

オール博多弁。客席では親しみの笑いがドツと湧く。祖国に急ぐ孫文が姪と別れの場面では、ソツと涙をぬぐう姿もあちこちに。私もホロリとした。次には浜辺の岩陰から福祿寿、恵比須、大黒の大人形が現れ、コミカルに笑いの輪を広げる。

「博多祝い歌」の踊りは全員の手拍子となり、フィナーレ総踊りの場への大拍手は、ここ博多座で最大級のものとなった。幕が下りても、胸の昂りが残る。

「みんな代表さんに『お疲れさま』ば言おうえ」——イラストレーションを担当した純粋博多っ子、西島伊三雄さんの声に、数人で楽屋に押しかけ、畑代表と手を握り合ったあと、近くの店で放談会となった。

「洗練されとるなあ」「舞台稽古ば見たばつてん、優しか顔で鋭く厳しか声の飛ぶ。あれが生きるっちゃ（のだ）なあ」「皆さん、基礎がキツチリして踊りがのびのびと大きい。自分が主役という気迫がある」

「楽しくて華やか」「ようも（よくも）まあ、博多の芝居は作ってくれたなあ」などなど。

私は不可解だった登場人物模様が、実在と架空で地域の精神風土を描出する作者・三隅治雄先生の巧みな創作世界であるとも知った。「涙を宝石に変えるため踊りを教える」など忘れられない言葉にもふれた。関係の皆様にも厚くお礼を申し上げます。



こうしらが 博多歴史研究家

20世紀の掉尾を飾った。

舞踊劇

博多どんたく譚

ものがたり



## 舞踊家の条件

の条件

舞踊評論家

福田一平



舞踊振付の先達畑先生から「舞踊家の条件」について何か書くようにお電話をいただいた。簡単なようでも難しいテーマです。考えた結果、毎日大学院の舞踊コースの学生と論じ合っていることをそのまま書くことにしました。

人間のもつ感覚的なものは何らかの形象になって表されます。そして理論的なものはそのものの内容を認識する役割を果たすこととなります。人々はこの二つの作用によって表現行為（または芸術行為）を行う訳ですが、人間の表現には重要な体験認識なるものがあります。暗い嬉しい痛い美しい等々、そうした生きて来た体験のすべてが発想行動の基になっているのです。

身体を動かす楽しさの体験認識があったり、海山、花の美しさや、人の愛の優

しさ尊さを体験認識したところが芸術表現の心を刺激して実行へと促すのです。私はい々の日常社会の中で、本当に真なるものは「愛と美と自然の摂理」だけだと思っと思っています。その他のことは大抵不純なもの加わっているからです。

ですから「舞踊家の条件」は、生き物すべてに愛をもてる人、自然の美や他人の真意に心から喜びを感じられる人、そして自然の摂理（運動の法則も含めて）をよく理解できる人、この三つがあれば誰でも素敵な舞踊家になれると信じています。

時代の流れは舞踊家にも色々なものを求めています。好きで上手であればいいと言った時代とは変わってきています。でも私は「愛と美と自然の摂理」こそ生きて踊ることの全てだと思っています。

Hakata Dontaku story







# 新世紀での 飛躍を念じて

舞踊評論家 長田 午狂

菊の会が創立されて、第一号の会報を創刊した時に、私はお祝いの辞と今後を大いに期待する旨を書かせていただいた。それから二十八年間、菊の会を主宰する畑道代さんの構成・振付・主演による民謡・歌曲を題材とした独特の舞踊劇の大作を、次から次へと上演して、素晴らしい成果を挙げ



ている。そして目度度く二十一世紀を迎えたが、その年頭の会報に、再び筆を執らせてもらい、改めて菊の会との御縁の深さを、痛感せずにはられない。菊の会の上演演目は一つ残らず総て観賞しているが、創立当時の幼い少年少女が、今や壮年に成長して、菊の会公演の舞台の姿を見ていると、これまでに育てた畑さんの手腕と、それに応えた門下生に心から拍手を贈りたいと思う。

去った二十世紀の最後に菊の会が上演したのは、『博多どんたく譚』であった。明治時代の文明開化を背景に、その頃の世相を取り扱ったスケールの大きな作品だが、殆ど川上音二郎（原 聰）と大神常吉（佐竹永光）の対話で内容を説明して、芸妓などの踊りや群舞でつなぐ「レビュー」

## 友の会会長 年頭御挨拶

鹿島建設株式会社

顧問 小島 三雄

輝ける二十一世紀開幕の新年誠におめでとうございませす。

昨年八月、菊の会友の会総会の席上にて、神谷 龍氏の後任として、不肖私友の会会長を仰せつかりま

した。

時恰も戦争の世紀から、平和・人間の世紀へ大転換する本年、創立二十八周年を迎える我が国、唯一の舞踊集団菊の会が、畑代表のもと若い方々を結集して日本の伝統舞踊の継承、発展を目指し、真剣に熱意を込めて、取り組み精進しておられる姿に、二十一世紀の明るい展望を実感しております。今春には、いよいよ待望のアメリカ公演が現実

し、更に日本はもとより世界へ菊の会の文化活動が、益々大きく活発に展開されていく時、友の会の持つ意義は誠に大きいといわなくてはなりません。これからも会員各位の深く温かい御理解のもと、支援の輪を幾重にも拡げていただきたいと存じます。何分宜しくお願ひ申し上げます。

年頭に当たり、皆様方の御健康と御活躍を衷心よりお祈り申し上げます。

### Notes on the performance

## 「追分の女」の 公演に寄せて

舞踊評論家 垣田 昭  
Akira Kakita



舞踊評論家 長田 午狂

形式になつてゐる。畑さんは芸妓らを鍛える高場藤という博多女で登場するが、さすがに品格があつて場面が引き立つが、特にこれという仕どころのないのが、いささか寂しいと感じられた。しかし、これからは若い人達をもっと頑張つて菊の会を支えてこそ長く続けていけるのだからおおいに

研鑽していつてほしいと思ふ。新世紀の幕は平成十三年の元旦と共にあけられた。菊の会の創立三十周年も手の届くところにある、益々



の御活躍と尚一層の御発展と御繁栄をお祈りして、私の二十一世紀における最初のお祝いの言葉とさせていただきます。

（十月六日→九日京都八瀬研修所ホール）  
舞踊集団「菊の会」が京都八瀬研修所公演として三

隅治雄作演出の歌舞劇「追分の女」を公演した。舞台は北海道の江差。この港に住む京生まれの回船問屋の未亡人が畑道代。かつて鯨の大漁に栄えた港町、そして不漁に衰退して来た港町、その江差の人々のよろこびとかなしみを映じている。江差追分々を中心に据えて、港に生きた人々の哀歓がつづられて行く。人生は一期一会、出逢いと別れ。回船問屋の女主人がこの栄枯の港に必死に生きた人生ドラマが描かれる。カットバックの手法を取り入れた隅治雄の演出は練れている。主題音楽が江差追分とすれば副主題が畑道代が舞う地唄「雪」である。繊細な情念が陰影深い袖づ

かいと身のこなしに現われ哀切さが伝わる。常に気丈で明朗な漁師の娘を演じた木村香澄の江差追分は、全国大会優勝だけあって、さすがにすばらしい。伸びやかで張りのある追分を聞かせた。また佐竹永光や原聰枝木茂などのベテランたちが達者な群舞や演技で要所を引き締めていたのは心強い。

人生に幾度もある岐路——心の追分々を乗り越え、回船問屋の女主人と共に江差の海に生きて来た人々の哀歓を見事に描いた舞台であった。改めて「菊の会」の運動を牽引して来た畑道代的情熱に感銘した次第である。

月刊舞踊2000  
12月号掲載記事より



# Information

## 「早春に舞う 菊の会アメリカ公演」

Kikunokai News



これまで菊の会では数多くの海外公演を行い24カ国の国々を廻って参りました。

この度、文化庁の芸術創造活性化事業（アーツプラン21）と、（財）東京都歴史文化財団より助成を受け、「日本のおどり伝統と創造、菊の会日本の心を躍る」と題して3月6日から21日まで、アメリカ公演を行う運びとなりました。

場所はニューヨークとロサンゼルスで、これまでにヨーロッパ、インド、中国をはじめとするアジア諸国、また中近東各国等の公演はありましたが、菊の会独自のアメリカ公演は初めての事です。演目は創作舞踊 四季の抒情「風道」と畑代表による長唄「乙女竹」そして民族舞踊詩「海はるか日本を躍る」を上演致します。畑代表は「世界の芸術家達が集まるニューヨークでの舞台を経験する事で、公演メンバー1人1人が何かを得られればと、期待しています」と話しています。

この公演には友の会を中心とする菊の会アメリカ公演記念ツアー」を企画しています。（菊の会事務所にて申し込み受付）また、渡米に先立って派遣記念公演が2月12日、13日に日本橋公会堂で、14日は所沢市民文化センターミュージズ（中ホール）で行われます。

皆様のお越しを心よりお待ちしております。



### 【問い合わせ】

記念ツアー学校公演、広告や上記の詳細等のお問い合わせは  
03-5983-6001 舞踊集団 菊の会「企画部」までご連絡下さい。  
Kikunokai ホームページ <http://kikunokai.co.jp/>

## 2001年菊の会公演予定

おどり初め 菊の会スタジオ

1月21日(日) 12時開演 入場無料

新春菊の会特別公演 大分県別府市杉乃井ホテル

1月 5日(金)~31日(水) 1時15分・8時開演

アメリカ派遣記念公演 日本橋公会堂

2月12日(祝・月) 6時30分開演

13日(火) 2時30分・6時30分開演

アメリカ派遣記念公演 所沢市民文化センターミュージズ

14日(水) 2時30分・6時30分開演

ニューヨーク公演 ケイ・プレイハウス

3月 9日(金) 6時30分開演 (ガラ・レセプション)

10日(土) 7時開演

11日(日) 3時開演

ロサンゼルス公演 ジャパン・アメリカン・シアター (日米劇場)

3月17日(土) 6時30分開演

18日(日) 2時開演

京都おさらい会 八瀬研修所

4月 8日(日) 1時開演 入場無料

さつき会 北トピア

5月 5日(祝・土) 3時30分開演

第27回菊の会教室発表会 文京シビック大ホール

8月12日(日) 12時開演 入場無料

※上記は1月現在の予定で、やむを得ず変更する場合がありますので、ご来場の節はお電話でご確認下さいませようお願い致します。

## Coffee Break

ESSAY

### 『日本人としての誇り』 公演メンバー 渡辺伸子

私が最近読んだ本の中で、日本料理「吉兆」の御主人湯木貞一氏の言葉が大変心に響いた。それは「日本料理の基本として料理人にはまずセブンスを身につける事が大事であり、美しい物を見て、美しい心で、美しく毎日を過ごせば、自然にポイントがわかる。

例えば毎日をただ漫然と頭を働かせず、汚れたままの割烹着を着て、それを自分で汚いと思う心がなままた料理だけを美しく盛りつけ様としてもだめです。たえず自分が心も身の回りも美しくしてこそ美しいか汚いかを見極められる。その中でいい盛りつけ、いい料理が出来る様になる」と。幼い頃に「誰もいない自分一人の時にこそ自分に厳しく努力をして行く、そこに初めて人に何かを

感じさせ感動させる舞台に必要な何かが身に付くものです。」と教えられてきました事に共通するものを感じました。

日本の文化の一つとして、目に見えない部分を大変大事にし尊重するという事がありますが、その事を自分が感じなければそれまでになつてしまつと最近特に感じています。

今、私達の年代でも自分一人で着物が着られる、着物がきちんとたためる、と言う事がいかにめづらしく貴重であるかを日頃の生活の中で知らされています。日本人として、日本の良い伝統や日本文化の精神に誇りをもって、次の世代に伝えていける舞踊家を目指し、日々努力と勉強を怠らず、生涯求道の心で頑張つて行きたいと思っています。



### プロフィール 渡辺伸子

Nobuko Watanabe

4歳から畑道代に師事。

菊の会の作品および数々の海外公演に出演。

1998年全国舞踊コンクール(東京新聞社主催)邦舞第1部で3位入賞。